

## 論 説

## ナチズム支配下のウィーン大学

伊 藤 富 雄

## 目 次

- はじめに  
I ウィーン大学のナチ化  
II ウィーン大学からの教員の追放  
III ウィーン大学からのユダヤ人学生の追放  
IV ウィーン大学に於ける学位剥奪  
おわりに

## は じ め に

1938年3月のナチス・ドイツによるオーストリアへの侵攻、そして4月の国民投票に基づくオーストリアのドイツ帝国への「合邦」はウィーン大学を始めとするオーストリアの大学に大きな変化をもたらした。ユダヤ人であるという「人種的」理由や「政治的」理由から多くの教員や学生が大学から追放され、さらには市民権や国籍、そして取得していた学位も剥奪されてしまった。そのために経済的基盤を失い、社会的にも迫害され、遂にはオーストリアを去り、パレスティナやアメリカなど国外へ逃れていった人びとも数多くいた。しかしながらそうした彼らの実態の研究はオーストリアでは1970年代以降にようやく本格的に開始されたのだった<sup>1)</sup>。

本稿はそうした先行研究を基にナチ支配下のウィーン大学に於ける教員、学生の追放、学位剥奪の実情を明らかにするものである。

## I ウィーン大学のナチ化

1938年2月12日、ヒトラーはオーストリア首相シュシュニクをベルヒテスガーデンの山荘へ呼び出し、オーストリア国内に於けるナチスの政治犯を釈放させ、ナチスのザイス＝インクヴァルトを内相として入閣させ、彼に一切の警察権を与える、との内容の10カ条の協定にサインさせた。シュシュニクはしかしその後、労働者を中心にした左翼勢力に接近し、政治活動の自由を約束するなど譲歩し、彼らの力を借りてヒトラーに対抗しようと決意した。そして

1) とりわけ以下の二人の論文がその契機となっている。

Roland Floimaier: Die Geschichte der österreichischen Studenten-Union (ÖSU), Diss.Univ.Salzburg, Salzburg 1974.

Helga Zoitl: Kampf um Gleichberechtigung. Die sozialdemokratische Studentenbewegung in Wien 1914-1925, ungedr.phil.Diss.Univ.Salzburg, Salzburg 1976.

3月13日にドイツとの合邦を問う国民投票を行なう旨を発表した。しかもこの投票資格は24歳以上とされ、多くの若いナチ党員に投票資格を与えないように考えられていた。これを知ったヒトラーは激怒し、首相シュシュニクの即時辞任、国民投票の無期延期、ザイス＝インクヴァルトを首相とする内閣を求める最後通牒を送った。首相シュシュニクはイギリスやイタリアなどに助けをもとめたが、成功せず、やむなく政権をザイス＝インクヴァルトに譲った。しかしながらヒトラーは国民投票前日の3月12日、新首相ザイス＝インクヴァルトの要請という口実でドイツ国防軍をオーストリアに侵攻させ、オーストリア国内における全権力を手中にした。同時にヒムラー指揮の下に数千人のナチスに敵対的だった政治家やユダヤ人の逮捕が開始された。まさにその日の内に、当時のウィーン大学学長シュペートおよびアカデミー評議員はザイス＝インクヴァルト首相に祝福の手紙を送ると共に、全面的な忠誠を誓った。3日後の3月15日にはシュペートは「学長の職務が今後は党員である人物によって担われることになれば、ウィーン大学のために良い結果をもたらすことになる」との認識の下に辞職を願い出た<sup>2)</sup>。後を継いだのはナチ党の信頼厚い植物学者のクノルだった。彼はドイツ軍侵攻以前より、ナチスの親衛隊の制服を着て講義を行ない、一度は大学当局に内部告発されたこともあった。この筋金入りのナチ党員である新学長クノルが今や大学の「指導者」となり、国家とナチ党の利益を護るために、大学業務の全てに於いて彼の同意が必要となった。

この3月15日にはヒトラーはウィーンに凱旋し、宮殿そばの英雄広場に集まった約20万の市民から熱烈な歓迎を受けている。クノルをはじめとする、新たに任命されたオーストリアの各大学の学長たちはヒトラーが滞在していたウィーンのインペリアル・ホテルに出向き、ヒトラーに歓迎の意を伝えたのだった。クノルはウィーンの大学教授団の名前で「総統！ウィーン大学のナチスの教員は総統を熱烈に歓迎いたします」と挨拶した<sup>3)</sup>。この日以降、ウィーン大学構内ではナチスの突撃隊や親衛隊の制服姿が目立つようになった。それまでは非合法とされていたナチ党員の学生や教職員がナチスの制服を着用したからである。

こうしてウィーン大学は極めて短期間の間にナチ化されることになる。そのためにナチスの意向を受けた帝国文部省の代表団がウィーンに到着した。ザイス＝インクヴァルト政府の下で文部大臣を務めていたメンクヒンは飾りだけの存在となり、プロイセンの上級参事官フーバーが実質的な大臣として全てを取りしきった<sup>4)</sup>。

最初の措置としてそれまでの学部長は全員解任され、ナチ党に忠実だった人物たちが「臨時に」学部長に任じられた。全員が1938年以前に既に非合法のナチ党員だった。すなわち哲

---

2) Brigitte Lichtenberger-Fenz: "Es läuft alles in geordneten Bahnen". Österreichs Hochschulen und Universitäten und das NS-Regime. in: Emmerich Tálos u.a., Hg., NS-Herrschaft in Österreich, Wien 2001. なおこの論文には教えられることが多かった。

3) ebd., S.549.

4) ebd., S.550.

学部にクリスチアン、法学部にシェーンバウアー、医学部にペルンコップフ、カトリック・神学部にツェーエンバウアーが起用された<sup>5)</sup>。

ナチスの大学政策は「ナチ化」による教員の再編成，ナチズムに忠実な学生の育成，「指導者原理」による大学憲章の改正，「民族的」視点による学問分野の政治化，「最終勝利」のための研究と開発の手段化，の5つから成り立っていた<sup>6)</sup>。

「ナチ化」による教員の再編成では，ユダヤ系教員を大学から追放するために1939年2月の「帝国大学教授資格取得規定」と1940年1月の「帝国助手法」の二つの法的整備によって完成される。

ナチズムに忠実な学生の育成では，「ドイツ学生の最高の政治教育の担い手として総統から委託された」団体であるナチスの学生組織「国家社会主義ドイツ学生連盟」が中心となり，「学生とは民族へ奉仕する存在である」とのスローガンの下に「犠牲を厭わない姿勢」，「民族と総統への献身」，「ドイツ国民への奉仕」の精神を学生たちに叩き込んでいく。1938年10月1日からは帝国内務大臣の指示により「勤労奉仕義務」が導入され，農家や工場での勤労奉仕も行なわれるようになる。

「指導者原理」による大学憲章の改正では，学長クノルは1938年4月23日の追加の教授宣誓の折に以下のように「指導者原理」を簡潔に説明している。

大学というものは指導者原理に従って決められている。学長は大学の指導者である。学部長は学部の指導者であり，他の下部組織もそれぞれの指導者を有しており，各自は自分たちの上司である指導者に忠実に仕える義務を有している<sup>7)</sup>。

「民族的」視点による学問分野の政治化では，後の「安楽死」政策にも繋がる「人種衛生学」や「遺伝学」などが進められることになった。さらにこうした学問は1943年には「人種生物学」へ統合される<sup>8)</sup>。

「最終勝利」のための研究と開発の手段化では，国防化学，国防心理学，国防病理学，国防医学，国防衛生学，国防毒物学などが用意された<sup>9)</sup>。7年にわたるナチ支配の間にウィーン大学では既存の研究所の再編成が行なわれ，9つの新たな研究所が設立された。1940年には「生活経済学研究所」，1942年には「女性学研究所」が，さらには「通訳教育研究所」や「身体訓

---

5) Sebastian Meissl, Wiener Universität und Hochschule. in: "Wien 1938", Österreichischer Bundesverlag, 1988, S.197.

6) Brigitte Lichtenberger-Fenz, a.a.O., S.554.

7) ebd., S.555.

8) ebd., S.561.

9) ebd., S.557.

練研究所」も設立された<sup>10)</sup>。こうしてウィーン大学の「ナチ化」は 1938 年夏学期で完了した。

## II ウィーン大学からの教員の追放

3 月 16 日から 25 日までの間に新体制とは相容れない教員たちの家宅捜索や逮捕が行なわれた。対象となったのはとりわけ旧身分制国家時代を代表する教授たち、カトリック・ナショナルな陣営の教授たち、「完全ユダヤ人」および「混血ユダヤ人」の教授たちだった<sup>11)</sup>。その中には学生たちからはナチ党のシンパと見られていたキリスト教哲学のアイブル教授、政治経済の専門家で極右のショナリストとしても知られていたシュパン教授、衛生学のロイター教授なども含まれていた。また国際的にも有名だったユダヤ人の原子物理学者エーレンハルト教授はオーストリアからの即刻退去を命じられた<sup>12)</sup>。

3 月 22 日、追放を免れ、新体制に受け入れられたウィーン大学の全ての教授や助教授たちは以下のような宣誓書でヒトラーに忠誠を誓わされた。

私はドイツ帝国と民族の指導者アドルフ・ヒトラーに対し忠誠かつ従順であり、法を遵守し、自己の責務を誠実に果たします<sup>13)</sup>。

翌 3 月 23 日、学長クノルは「大学の内的組織の粗構造は完成し、全ては順調に進んでいる」とベルリンの文科省へ報告している<sup>14)</sup>。

しかしながらナチスの体制と相容れないさらなる教授たちの追放は 4 月に入ってからも続けられている。帝国文部大臣のルストはそのための指針を与えている。

これからはオストマルクの大学に於いては人種の異なる教員、憎悪の念を抱いてドイツ民族やナチズムに敵対してきた教員に居場所はない。また学問的適性もないのに政治的立場からの

10) ebd.

11) Herbert Posch u.a.Hg., "Anschluß" und Auschluß 1938. in: Friedrich Stadler (Hg.): Emigration-Exil-Kontinuität. Wien 2008, Bd.8., S.101. この本は 500 ページを超える大部なもので、正確な記録に基づく実証的な研究書であり、ウィーン大学を追放された学生の詳細が記されており、大いに参考となったことを付記しておく。

12) Albert Massiczek: Die Situation an der Universität Wien März/April 1938, in: "Wien 1938", Österreichischer Bundesverlag, 1988, S.222.

13) Brigitte Lichtenberger-Fenz: Österreichs Universität 1930 bis 1945. In: Stadler Friedrich (Hg.), Kontinuität und Bruch 1938-1945-1955. Beiträge zur österreichischen Kultur- und Wissenschaftsgeschichte, Wien-München 1988, S.75.

14) Sebastian Meissl, a.a.O., S.197.

み招聘され、雇用されていた者たちも排除されねばならない<sup>15)</sup>。

ウィーン大学のナチ化を推進していたドイツ人責任者は4月の初めに、追放すべき教授たちのリストを作成していることをベルリンへ報告している<sup>16)</sup>。こうしたリストによって4月6日にはユダヤ系の全ての教員の教授資格が剥奪された。

公的な統計によれば、哲学部だけで45名の正教授の内14名、助教授22名の内11名、私的講師159名の内56名がその職を失った。法学部は76名の教員中38名が解職された。特に劇的だったのは医学部の教員に対するナチスの介入だった。197名の教員のうち132名が職を失った。それは医学部の全教員の78%にも該当した。この高い割合はナチスの権力掌握後にドイツ帝国全土で行なった教授の追放が僅か10%強だったことを考えると、驚くべきほど高い割合である。追放された教授の中にはナチスに新たに忠誠を誓うことで職を維持しようとする者もいたが、無駄だった。こうした追放された教授たちは同時に年金の受給期間の短縮や年金そのものの廃止という経済的な迫害も受けることになり、学問の終焉だけでなく、それまでの日常生活の終焉をも甘受せざるを得なくなった。医学部を追放された132名のうち98名が強制移住させられ、その後の運命が不明なものも18名に上っている<sup>17)</sup>。

ウィーンに存在した他の大学の状況を見れば、農業大学では教員の三分の一以上が追放されているが、ウィーン工科大学では58名の教授、助教授のうち追放されたのは僅か12名、講師の109名のうち追放されたのは16名に過ぎなかった<sup>18)</sup>。そのことは工科大学では「合邦」以前から「ユダヤ人」や「旧体制信奉者」の追放が行なわれていたことを物語っている。またウィーン以外の大学でもほぼ同様の措置が取られ、多くの教員が大学から追放されている。例えばグラーツ大学では全教員の34%にあたる35名、インスブルック大学では43名が追放されている<sup>19)</sup>。

4月20日のヒトラーの誕生日を祝して行なう予定だったウィーン大学の再開は復活祭のため4月25日に延期された。科学アカデミーの新会長に任命された歴史学教授スルビクは4月27日の初講義で、ドイツ人の千年にわたる夢が実現し、精神的統一だけでなく、国家的統一が実現したと述べ、「ひとつの国民、一つの帝国、一人の総統」というナチスの挨拶で講義を締めくくった<sup>20)</sup>。

15) Brigitte Lichtenberger-Fenz: Österreichs Universität 1930 bis 1945, a.a.O., S.75.

16) Will Weinert: Die Maßnahmen der reichsdeutschen Hochschulverwaltung im Bereich des österreichischen Hochschulwesens nach der Annexion 1938, in: Konrad Helmut/Neugebauer Wolfgang (Hg.), Arbeiterbewegung, Faschismus, Nationalbewußtsein, Wien 1983, S.129.

17) Sebastian Meissl, a.a.O., S.198.

18) ebd.

19) Brigitte Lichtenberger-Fenz: "Es läuft alles in geordneten Bahnen", a.a.O., S.552.

20) ebd., S.550.

またウィーン大学の回廊に飾られていた歴代の著名な教授たちの胸像や銘板も「ユダヤ人ないし半ユダヤ人」の場合には撤去されてしまった。

### III ウィーン大学からのユダヤ人学生の追放

1938年のオーストリア「合邦」と共に「人種的」理由によるウィーン大学からのユダヤ人学生の追放も開始された。1938年3月29日、文科省は「ドイツ・オーストリアの大学がユダヤ人聴講生によって過度に占められるのを防ぐ」ためとして幾つかの命令を布告した。第一に、1938年夏学期には国内外のユダヤ人学生のいかなる入学手続きも行なわないこと、第二に、既に登録されている入学手続きは条件付きで有効とし、いつでも取り消されうるものとする事、第三に、入学制限 (Numerus Clausus) をオーストリアのユダヤ人学生に適用すること、従ってユダヤ人学生は学生定員の2%しか入学が認められないこと、第四に、ユダヤ人学生はさしあたりは卒業試験を受けることが許されないこと、第五に、全ての学生は「自分はユダヤ人ではないし、ユダヤ人と見なされるいわれはない」という宣言をしなければならない、と発表した<sup>21)</sup>。

また二日後の3月31日には「自分はユダヤ人ではない」との誓いを記した書式も示された。その書式では「ユダヤ人」をこう規定していた。

ユダヤ人とは、少なくとも人種的に3人の完全ユダヤ人の祖父母がいる者である。また祖父母4名の内一名がユダヤ教共同体に所属していれば、完全ユダヤ人と見なされる。祖父母の二人が完全ユダヤ人のユダヤ人混血児はユダヤ人と見なされる<sup>22)</sup>。

1937/38年度の冬学期にウィーン大学の学生総数の15%が身上記録でユダヤ教に属していることを申告している。さらに1938年夏学期でも相変わらず10%以上がユダヤ教に所属している。すなわち2%の入学制限はウィーン大学のユダヤ人学生の80%の排除を意味していた。因みに当時のユダヤ人学生の学部所属の割合は、神学部は当然ながら0%、法学部は1937/38年度の冬学期には8% (1938年夏学期までには6%に減少)、哲学部は13% (1938年夏学期までには8%に減少)、最も割合の大きかった医学部が23% (1938年夏学期までには17%に減少) だった<sup>23)</sup>。

文科省の布告は、この入学制限の割合の中で、比較的上のセメスターの学生を優先して許可を与えようとするものだった。布告はウィーン大学では象徴的に4月25日、すなわち大学再開の日に告知された。

---

21) Herbert Posch u.a., a.a.O., S.105.

22) ebd.

23) ebd., S.106.

この措置により多くのユダヤ人学生は、授業料を既に支払っているにもかかわらず、学修を継続する権利を失い、さらに授業料返還の請求権すら奪われてしまった。

1938年夏学期の5月14日の時点でのウィーン大学のユダヤ人学生数は国内ユダヤ人学生621名、外国人ユダヤ人113名、合計734名(全学生7238名)だった。この数に基づいて大学は5月23日に国内ユダヤ人学生の各学部受け入れの数を決定した。受け入れ学生の多い順から医学部56名、哲学部45名、法学部34名、カトリック・神学部1名の合計136名だった<sup>24)</sup>。

合計で哲学部で受け入れられた20名の男子学生と25名の女子学生たちの内、19名は第八セメスター(その内10名は女子学生)、1名の男子学生が第七セメスター、11名が第六セメスター、1名の女子学生が第五セメスター、6名が第四セメスター、1名の男子学生が第三セメスター、6名が第二セメスターだった。つまり受け入れられたユダヤ人学生の60%が最後の3セメスターに在籍していた。

医学部で受講を許可された第十セメスターに所属していたあるユダヤ人女子学生は、一ヶ月後、彼女の代わりに同じく第十セメスターにいた夫に委譲する申請をしている。しかしながら夫は結局はウィーン大学で学ぶことはなかった。彼はこう回想している。

1938年3月に私は大学での最後のセメスターにいた。そして最終試験の準備を始めていた。しかし「合邦」によって私の大学での学修は終わってしまった。私の年には医学生は誰一人として最終試験を許されなかった。5年間の学びが無駄になってしまった<sup>25)</sup>。

彼は同年にパレスティナへ移住している。その後ロンドンのイギリス軍で数年間の軍務に服した後、ロンドンの大学で医学の勉強を再開し、卒業することが出来た。彼はヨークシャーで医師となり、1998年にウィーン大学から他の追放された医学生たちと共に名誉回復を受けている。

就学許可された56名の医学部学生のうち13名は後に許可を取り消されている。また2名は、いかなる理由からか、その後ダッハウの強制収容所送りとなり「許可は1938年7月12日に取り消し(ダッハウ)」との記録が記されている<sup>26)</sup>。

大学での学修継続を認められ、卒業して学位を取得する「非アリア人」学生に対して、大学はアリア人学生とは別個の学位授与の方式を規定した。一言で言えば学位授与式を「厳かに」執り行なってはならないということだった。すなわち、学位授与式に学長は出席するが、

---

24) ebd., S.110.

25) ebd., S.113.

26) ebd., S.127.

厳粛な雰囲気を生み出すガウンは着用せず、博士号証書の手渡しも学長ではなく、職員が手渡し、またそれまではラテン語で行なわれていた授与式はドイツ語で行なわれることになった。さらに学位を得ても、それをオーストリア国内で活かすことは許されなかった。例えば医学博士を取得する学生は必ず次のような内容の書状に署名せざるを得なかったからである。

私はウィーン大学の医学博士号を取得しているが、旧オーストリア領内で医師としての職業を行使することは断念します。その証拠として自筆の署名をします<sup>27)</sup>。

1938年7月に文学博士号を取得したあるユダヤ人女子学生は彼女の学位授与の様子をこう記している。

当時はもう学位授与式は厳かではありませんでした(。。。)。学位授与の事務担当者は農夫の着の上着を羽織っていました。彼が私たちを軽蔑していることを示すためにです。彼は左手で私に学位証書を手渡しました。その後、「私は大学の建物内には二度と立ち入ることはありません」と右手で署名しなければなりません<sup>28)</sup>。

彼女はその後すぐにアメリカに移住していった。彼女が博士号を取得した1938年7月21日の授与式では哲学部で37名、医学部で59名、法学部で32名の「非アーリア人」に学位が授与されている。その次の学位授与、それは結果的に最後の「非アーリア人」への学位授与となったのだが、1938/39年度冬学期の10月31日に行なわれ、哲学部で20名、医学部で40名、法学部で3名に学位が授与された。これ以降は唯一の例外——ポーランドの女子学生——を除いて「非アーリア人」にはウィーン大学で学位を得る可能性は全くなかった<sup>29)</sup>。

こうした2%の入学制限の下に学んでいた少数のユダヤ人学生も、1938年11月のいわゆる「帝国水晶の夜」以降は全て大学から排除された。即ち全てのユダヤ人学生、ないしは「ユダヤ人」と指定された学生は例外なく大学から締め出されたのだった。大学で学ぶためには血統証明書、勤労奉仕手帳、さらにはナチズム組織の加盟証などが必要となったからである。

#### IV ウィーン大学に於ける学位剥奪

ドイツのノーベル賞作家マンはボン大学の名誉博士だったが、1936年、亡命先のスイスの彼の元に名誉博士を剥奪する旨の連絡が届いた。マンはそれを長い間求められていたナチ国家

27) ebd.

28) ebd., S.131.

29) ebd., S.138.



に対する彼の立場表明として利用した。すなわち 1937 年 1 月、彼は『往復書簡』というタイトルで書簡を発表し、人間蔑視の、戦争をおおるナチ体制に借りを返したのだった。この『往復書簡』は 1 万 5 千部も売れ、多くの言語に翻訳され、『ドイツ古典作家の書簡。知への道』という偽装タイトルでドイツ国内でも販売された。

こうしたマン同様に、ユダヤ人として追放され、逃亡や国外へ亡命した学位所持者たちから、1933 年 7 月 14 日の「ドイツ国籍の付与の撤回と剥奪に関する法」に基づき、彼らの市民権、ドイツ国籍が剥奪された。それと同時に彼らの学位も剥奪されることになった。「国籍」を剥奪されるような人物に学位は相応しくない、という理由からである。

オーストリアではナチスによる学位の剥奪は 1939 年 6 月 7 月付きの「アカデミックな学位運用に関する法」に基づいている。その法によれば「学位授与者がそれに相応しかなかった事実が後に明らかになった場合」には学位を剥奪することが出来ることになっている。この法律は 1933 年 7 月 14 日付きの「ドイツ人国籍付与の撤回と剥奪に関する法」に基づいている。それは「ユダヤ人」で逃亡や亡命によりドイツ国外に逃れた学位取得者をターゲットにしたものである。この法律で国籍を剥奪された「ユダヤ人」は学位も剥奪され、同時に財産も没収された。彼らから単に国籍を剥奪するだけでなく、あらゆる人間的、経済的な存在基盤を奪うのが目的だったからである<sup>30)</sup>。こうしてオーストリアの大学に学長や学部長からなる学位剥奪のための委員会が作られ、その委員会が学位剥奪を実行した。この委員会で該当者の事情聴取もなく学位剥奪が決定され、また該当者への通達もなされなかった。該当者の学位授与の記録が赤の斜線で抹消されただけである。中には理由は不明ながら抹消されなかったものもある<sup>31)</sup>。またこうした学位剥奪者の氏名はナチズム体制の公報、「ドイツ帝国報知新聞」や「プロイセン国家報知新聞」で公表された。

1943 年にはオストマルクを含む全ドイツ帝国に於いて学位剥奪の手続きが簡素化された。

ドイツ国籍の剥奪と同時に（。。。）ドイツ帝国の大学から付与されていたアカデミックな学位の喪失も生じるものとする<sup>32)</sup>。

ウィーン大学では 169 名の博士号取得者が学位剥奪リストに挙げられた。しかしその三ヶ月前の 1939 年 4 月、ウィーン大学では最初の学位剥奪が行なわれている。すなわち、哲学博士シュピッツァーからの学位剥奪である。彼は 1939 年 4 月 5 日に市民権の剥奪処分を受け、

---

30) Herbert Posch: "Akademische Ausbürgerungen" an der Universität Wien: Nationalsozialistische Aberkennung von Dokortiteln österreichischer Exilantinnen. Wien Mandelbaum, 2006, S.301.

31) ebd., S.306.

32) ebd., S.307.

同年 6 月 6 日に博士の学位が剥奪され、二度と与えられることはなかった<sup>33)</sup>。

主として「人種的」ないしは「政治的」理由によって学位を剥奪された人々は、それによって職を失い、あるいは就職のための資格を失い、経済的、社会的な存在基盤を奪われることになった。そうした犠牲者の中に哲学・神学者のブーバー、また政治家としても長年オーストリアの法務大臣を務めたグレー、作家で汎ヨーロッパ運動の創始者クーデンホーフ＝カレルギーなどがいた<sup>34)</sup>。

1944 年が学位剥奪の最後の年となったが、この年に剥奪された最後の事例は 1938 年にアメリカに亡命したウィーン大学教授で化学博士のマルクだった。マルク博士からの博士号剥奪は 1944 年 11 月 7 日になされた。戦後、彼はウィーン大学から再び学位を認められ、ウィーン大学の客員教授、さらにはウィーン大学の名誉メンバーにも選ばれ、ウィーン大学の黄金名誉賞も受賞している<sup>35)</sup>。

戦後になってようやく学位剥奪を受けた人々の学位の再授与が行なわれ始めた。

1945 年の連合軍によるオーストリア解放直後の 1945 年 7 月 9 日付きの規定により、「不当に学位を剥奪された博士号取得者」に大学が速やかに再付与することができる、との法的な根拠が与えられた<sup>36)</sup>。しかしこの規定は再付与することが「できる」のであり、自動的に再付与「しなければならない」とはなっていなかった。

1945 年以後の博士号の最初の再付与は当時司法省の事務次官だったグレーである。彼は「第一種混血」および「政治的理由から」博士号を剥奪されていた。1945 年 7 月 20 日、すなわち 7 月 9 日付きの当該の規定成立直後に、彼自身は再付与の申請を行なわなかったにも関わらず、ウィーン大学の積極的な働きかけにより再付与が決定されている<sup>37)</sup>。

ウィーン大学はすでに 1945 年 6 月の段階で予想された 196 名の学位再付与該当者のリストを作成させ、1955 年までに 13 名が学位再付与を受けている。またこの年の 4 月、ウィーン大学評議会は個人の申請がなくとも学位を遡及的に再付与することを決定した<sup>38)</sup>。

2002 年にウィーン大学でナチスによる学位剥奪の問題がクローズアップされた折に、1941 年 6 月 28 日付きの学位剥奪者 32 名のリストが発見された。32 名中 26 名が「人種的」理由によるものだった。また同じ年にザルツブルクの歴史家が、ウィーン大学卒の著名な作家ツヴァイクはいつ再授与がなされたのかを問い合わせ、彼には依然として再授与がなされていないこ

---

33) ebd., S.303.

34) ebd., S.301.

35) ebd., S.303f.

36) ebd., S.307.

37) ebd., S.309.

38) ebd., S.310.

とも判明した<sup>39)</sup>。こうした状況を受けてウィーン大学は翌2003年に、ナチスが行なった人種的、政治的理由による学位剥奪は無効である、との声明を出した。また2004年3月31日の記念の催しの後、詳細な再調査がなされ、人種的、政治的以外の理由から、すなわちホモセクシャル、兵役拒否、墮胎を理由に学位を剥奪された人々の学位の再授与も開始された。2004年の記念の催しの際に、著名な法律学者のホフマンスタールが剥奪された学位の再授与を受けている。彼はウィーン大学で学位を得た後、ナチスの迫害を逃れ、1938年にウィーンを去り、最終的にアメリカへ亡命した。アメリカの大学で彼は再度博士号を取得し、弁護士としてまた法学者として活躍し、幾つかの大学で教鞭もとっている。1971年に亡くなった彼に、死後40年以上たってから学位が再授与された<sup>40)</sup>。

### お わ り に

オーストリアの1938年の「合邦」以降のウィーン大学の状況、特に人種的、政治的理由による教員や学生の追放や学位剥奪の状況を見てきたが、それが殆んど支障や抵抗なく進められていったのは何故だろうか。それは偏にオーストリアの大学の歴史にあると言えよう。オーストリアの大学はそれまでも常に教会や国家権力に忠実だっただけでなく、19世紀末以降は大学自らがドイツナショナリズムや反ユダヤ主義を育成、養成していたのだった。リベラルな教員、民主主義や社会主義を信奉する教員はすでに第一共和国時代にほとんど追放されており、さらにドルフース、シュシュニクの身分制国家によって最終的に駆逐されてしまった。左翼的な学生グループも1934年以降は非合法となっていた。そうして状況を踏まえれば、1938年3月以降の教員や学生の追放が殆んど支障なく進み、同時に大学に於ける学問のナチ化も抵抗なく進行していったことも頷ける。

---

39) ebd., S.311ff.

40) ebd., S.314.

